

Title	俳句
Author(s)	白井, 文溪
Citation	懐徳. 1936, 14, p. 81-82
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/88960">https://hdl.handle.net/11094/88960</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

和歌

盆踊を見て

山里のしづけき生活クラシたへむと踊り明すか盆の月夜を

音頭とる人の破れ傘ヤまたをかし月さす寺に盆をどりする

そが中に踊り耽けたる人のさま著シツくも見えて月もよろしき

をとめらも今は交りて夜の更けも山の冷えをも知らず踊れる

ある禪師が明石遊行を物語りける折

蝸壺のたこの眞似して芭蕉の句説きます僧のかしら光るも

俳句

白井文溪

縫ひ物に團扇かくるゝ端居かな

林田良平

埃り道寺のくぶりに蓮見えて  
棚の曉蓮に雨聞く宿うれし  
月出でゝ明るく暗らき野道哉  
おほつかなき野道を月に一人ゆく

山田平歩

星涼し舟曳き上ぐる汐を待つ  
星涼し満ち来る汐に艀を習ふ  
白雪の風にわかるゝ夜は秋

詩仙堂 二句

落椿藪の小門に低徊す  
行春をたづねて雨の詩仙堂

浦山右拙郎

昭和十一年七月廿五日懷徳堂々友會上醍醐見學  
市電車中梅鉢の神輿舁と乗合ふ

昨日 今日 大阪は天神祭かな